

このところ相当暑い日が続いております。暑いと言ってもめったに表示されない気温40度越えの地域がニュースで出てきます。このまま続けば水不足は必至で、四国の水だめとも言われる早明浦ダムの貯水量はどれくらいかといった懐かしい名前も出てきたりしています。災害が起こった時は何が無くとも水を確保することがもっとも重要なことと言われます。人間の身体にとって水はかせません。また水がなくては作物は育ちません。あたりまえのことですが、水がなければどんな植物も育ちませんし、動物も水なしには生きていけません。人間のからだは、赤ちゃんの場合は80%、大人は60%が水分でできているそうです。そんなに水分が多いのであればタオルのようにギュッと絞れば、太った人もたちまちスリムになりそうですが、そうはいきません。体内の水分が減ると、喉が渇き、発熱し、脱水症状になります。ふつう、成人は一日2リットル以上の水を体外に出しています。ですから2リットル以上は補給する必要があります。しかし、一度にたくさん水分をとりすぎると水中毒になるので、何回かにわけて飲むと良いそうです。多くの人は、十分な水分をとっておらず、私たちのからだは、私たちが思う以上に渇いていると言われます。帰りにぜひ水分補給をしてください。

私たちのからだは渇き、水を求めます。それは水分が身体の外に出ていくのに合わせて補う水分を求めているとも言えます。同じように私たちのたましいも渇き、その渇きをいやすものを求めています。つまり日々、魂のいわば水分を奪い取るようなものにさらされているからです。それはストレスといった言葉で置き換えられるようなものではありません。今朝の箇所は、イエスが「サマリアの女」と「いのちの水」についてお話をなさったことが書かれています。当時、ユダヤ人とサマリア人とは仲が悪く、互いに口を聞き合いませんでした。また、公けの場で男性と女性が語り合うということもありませんでした。ですから、「ユダヤ」の「男性」であるイエスが「サマリア」の「女性」と話しているというのは、普通のことではありませんでした。それなのに、サマリアの女がイエスと話し続けたのは、どうしてでしょうか？それは彼女の心に深い「渇き」があったからです。サマリアの女は、からだの渇きをいやすために井戸に水を汲みにきたのですが、同時にその心の中、たましいに深い渇きを持っていました。彼女が持っていた「渇き」はどんなものだったのでしょうか。

第一に、彼女には、「後悔」や「罪責感」がありました。彼女は5人の夫と結婚を繰り返しました。5人が5人とも亡くなったとは思われませんから、離婚し、再婚し、また離婚し、再々婚しということを繰り返してきたのでしょう。そして、6人目の男性とは結婚せず同棲していました。そういったことは古代のユダヤやサマリアでは、めったにないことで、社会から非難をあげ、人々から疎外されてしまいます。ふつう水汲みは、女性たちの仕事で、朝、涼しいうちに、女性たちが井戸端に集まり、いわゆる「井戸端会議」を楽しんだものです。ところがこのサマリアの女は、わざわざ、日中、暑い時に水を汲みにきています。自分が、そうした「井戸端会議」つまり「うわさ話」の「話題」にされていることを感じていましたから、他の女性たちに会いたくなかったと思います。彼女には、自分の思い通りに生きられなかったという後悔の念があり、また、人として、女性としてあるべき姿からかけ離れていることに対する罪責感がありました。それが彼女の心の痛みとなり、罪責感からの解放を求めてのたましいの渇きがありました。

第二に、他の女性はみな、楽しく人生を過ごしているのに、なぜ、自分だけがこんな惨めな目に遭わなければならないのかという「恨み」や「疑問」がありました。彼女が5人もの男性をとりかえたというのは、何も彼女がふしだらな女性だったからというのではないと思います。浮気をした男性から捨てられたり、暴力をふるわれたり、男性が酒に入り浸りになって働こうとしなかったりなどということだったかもしれない。彼女は、いわゆる「男性運」に恵まれなかったのでしょう。多くの人は、他の人々が幸せそ

うに見えると、人々を恨んだり社会を憎むようになりますが、「サマリアの女」にそのような思いがなかったとは言えないでしょう。しかし、それよりも、もっと彼女を悩ませていたのは、「なぜ私が」という問いでした。他の人は幸せなのに、なぜ自分だけにこんな不幸がやってくるのかという疑問です。

その答えは誰にも分かりませんし、分からないからこそ、「どうして」と答えを求めて心が痛み、渇くのです。

第三に、彼女には、自分が何者か、神がどのようなお方かを知りたいという強い願いがありました。彼女が、5人もの男性に裏切られたり、捨てられたりしても、まだ6人目の男性と一緒に暮らしているというのは、誰かに愛され、誰かを愛することなしには、人は生きていけないということを示しています。人は愛されてこそ生きる力を持ち、誰かを愛するという目的を持ってはじめて、生きる意義を見出します。そして、自分が何者かということを知るのです。彼女は、自分に愛を注いでくれる者が誰か、自分が愛を注ぐべき者が誰かを知らないでおり、そのために自分自身をも見失っていたのです。

このような渇きは、サマリアの女のような、特別な問題を持った人だけのものではありません。それは、ごく普通のどの人にもある渇きなのですがこのような求めは、普段はあまり表面に現われてきません。一時的に心を紛らわせることができるもの、忘れてしまえるものが世の中にたくさんあり本当の自分の問題と向き合おうとはしません。こうした求め、問い、また渇きは「スピリチュアル・ペイン」（霊的な痛み）と呼ばれます。今まで、心理学的に解釈されてきた罪責感や人生の疑問、また、自己の発見ということが、霊的な問題、魂の問題として受けとめられるようになってきました。そしてこの渇きはイエス・キリストによってのみいやされることを私達は知っています。

イエス・キリストは私たちのたましいの渇きをいやし、痛みを答えてくださいます。どのようにしてでしょうか。第一に、私たちとたましいの渇きを共有することによってです。イエスは、このサマリアの女の渇きをご存知でした。イエスはサマリアの女の人生のすべてを、神としてのお力によって見通しておられました。聖書にはサマリアの女の名前は書かれていませんが、イエスはその名前もご存知でした。そして、それとともに、ご自身が渇きを体験されることによって、イエスは、人の渇きを知ってくださいました。イエスはヤコブの井戸に来たとき、疲れを覚え、そこに腰をおろしました。喉も渇いておられ、サマリアの女に飲み水を求めたのです。病人をいやし、死んだ者さえ生き返らせるこのできたお方が、疲れ、渇きを覚えられたというのは、つい見落としがちですが、大切な事実です。それは、神の御子が人となられ、人としての制限や弱さのすべてを体験されたことを教えています。イエスはご自身が疲れを体験されたからこそ、身も心も疲れやすい人間に「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」（マタイ 11:28）とすることができ、私たちと同じように渇きを覚えられたからこそ、「だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい」（ヨハネ 7:37）とすることができたのです。イエスは人間のたましいの中にある渇き、霊的な痛みを、私たちと共有してくださるのです。

第二に、イエスは、ご自分のすべてを与えることによって、私たちの渇きをいやされます。井戸水は地面を裂き掘らなければ得ることができません。そのように、イエスは十字架の上でご自分のからだを裂かれることによって、人のたましいをいやす「いのちの水」をわき出させてくださったのです。イエスが十字架の上で息を引き取られたとき、兵士はその脇腹を槍でさしましたが、そのとき「血と水」とがほとぼしり出たと聖書は書いています（ヨハネ 19:34）。ある人はここで「血と水」とあるのにはもっと象徴的な意味があると言います。「血」は罪のゆるしを、そして「水」は新しいいのちを表わすのです。イエスの十字架上の犠牲によって私たちの罪がゆるされ、イエスの死によって、私たちはいのちを受けるのです。イエスはサマリアの女に「この水を飲む人はみな、また渇きます。しかし、わたしが与える水を飲む

人は、いつまでも決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます。」(ヨハネ 1:13,14)とされましたが、イエスが与える水とは、イエスご自身のことであり、イエスはご自分のいのちをあゝの十字架の上で捨てられることによって、私たちを生かす「いのちの水」となってくださったのです。鹿が谷川の水を求め、それによって渴きをいやされるように、人もまた、イエスの十字架から流れ出るいのちによって、その渴きをいやされるのです。

第三に、イエスは私たちに聖霊を与えることによって渴きをいやされます。イエスが「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになります。」(ヨハネ 7:37-38)と言われたとき、それは、イエスを信じる者が受ける聖霊のことを指していました。イエスは、信じる者に聖霊をお与えになり、聖霊が「その人の心の奥底から」流れ出るいのちの水のみなもとになってくださるのです。「心の奥底」という言葉に注目しましょう。聖霊は、私たちの「心の奥底」を住まいにされます。人は普段は、泣いたり、笑ったり、怒ったりなど、表面の感情の世界で生きています。しかし、大きな苦しみに遭い、心に重いものを抱えこんだとき、感情の世界が機能を停止して、泣けない、笑えない、怒れなくなってしまうことがあります。そしてそこでは感情をやわらげるだけの慰めや励ましは通用しなくなるのです。しかし、そんなときも、聖霊は、私たちの心の奥底のまだ、その奥底にいて、信じる者を支えます。私たちの深い渴きと苦しみをいやし続けてくださるのです。これが、イエスのいやしです。渴きはいやされます。主は私たちと共に、私たちのために渴いてくださいます。そして、渴きをいやすものを、私たちのたましいの奥底に与えてくださるのです。